第八号
2010年7月1日発行　編集・発行／森の仲間たち
森の会ニュース
MORINOKAI NEWS

会員だより

＊森の会会員の皆さまへ

地域科学部長　口蔵幸雄

地域科学部は、1998年に第1期生を迎え、本年で第13期生を迎えました。「地域科学」部という名の学部は日本で初めて創設されたものであり、学生に何を学ばせ、どのような能力を身につけて卒業してもらうかについて、試行錯誤してきました。また、教員側も「地域科学」なるものが、既存の学問分野のように1つの学問体系として成立するかについて喧々諤々の議論をしてきました。

また、学部開設以来、高校側や企業の説明会等で、「地域科学部」は一体何を教え、どのような専門的能力が身につくのかという質問攻めにあってきました。いまでは、「地域（岐阜から世界までの多様な地域概念）をさまざまな学問分野から総合的に学び、地域の抱える諸問題を把握し、解決策を模索する能力」を養う教育をすること、文系から理系までひじょうに多様な専門分野を持つ教員で構成され、幅広い分野の講義を選択でき、専門セミナーを中心に特定の専門分野をある程度深く学ぶことができること、1年次から卒業時までの連続・一貫したセミナーによる少人数教育が、地域科学部の特徴であるということが徐々に浸透し受け入れられるようになってきたと思います。これには、卒業生の皆さまが地域の様々な分野で活躍なさっていることも大いに役立っています。

昨年度、外部評価の資料とすべく、卒業生に対して「卒業後のいまの私から見た、地域科学部」というアンケートを行いました。在学時は分からなかったが、「幅広い分野」を学べたことが社会に出てから大いに役立っているという回答を多く得ました。私たちの教育方針が大筋で間違っていなかったと安堵しております（これからもよりよい教育に向けて大いに努力するつもりですが）。このことには外部評価委員からも大きな共感を得られました。

専門セミナーによっては、卒業生および教員が連絡を取り合い、定期的に会合を持つなど、卒業後も強い結びつきを保っていると聞いております。全教員による卒業生の就職先訪問を定期的に行っておりますが、卒業後のフォローについて十分ではなかったと反省しております。今後は、「森の会」を通じて、地域が学部と卒業生の結びつきをより強固なものにしていきたいと考えております。皆さまにもどうかご協力のほどお願いいたします。

＊林から「森の会」の皆さんへ　～森鷗外の大学論と学問観～

林　正子（地域文化講座・日本近代文学）

地域科学部卒業生の皆さん、地域科学研究科修了生の皆さん、そして「岐阜大学の〈地域〉」にさまざまなかたちで関わってくださっている方々へ――。

「お元気ですか?」

皆さんおひとりおひとりが、〈ご卒業〉後もそれぞれの場で、ますますご活躍なさっていらっしゃることを願ってやみません。

「森の会」会長の浅井彰子さんからいただいた今回の貴重な機会に、「森鷗外の大学論と学問観」の一端をご紹介したいと思います。皆さんにおかれましては、現在の生活のさまざまな局面において、大学や学問について懐かしくあるいはラディカルに、想い起こされることもおありではないでしょうか。おひとりおひとりが、ご自身の大学論・学問論を展開なさる際に、この拙文をささやかな契機や参考としていただければ、こんなに嬉しいことはありません。

＊

西洋文明を模範とし、あるいはその超克をめざして、さまざまの制度が樹立された近代日本という時空間において、森鷗外はどのような学問論・大学論を展開したのでしょうか。学問観の変容や大学の理念の揺らぎなど現代の諸課題に対して、一世紀以上も昔に発表された鷗外の学問観・大学観がもつ、現代的意義の可能性について模索してみたいと思います。

陸軍軍医として明治17（1884）年から4年間のドイツ留学を終えて明治21（1888）年に帰国した鷗外は、近代小説の先駆けとして知られるドイツ三部作『舞姫』『うたかたの記』『文づかひ』を執筆するよりも早く、論説『大学の自由を論ず』（「国民之友」明治22［1889］年7月）を発表しています。西欧における大学の創始・起源、大学草創期の内実と慣習、教会・政府による大学への干渉、学生生活の実態、イギリス・フランスの大学事情なども綴ったこの文章の主張は、大学本来の目的は〈学問の自由〉の精神があふれるドイツの大学においてこそ実現するというものでした。

この論説で、鷗外は大学の理念・目的を、〈自由〉の精神のもとに〈真理〉を探究し学芸・文化の振興をめざす場と規定し、ドイツの大学こそがその理念・目的を実現しているとして高く評価しています。

留学中に鷗外が身をもって実感した近代ドイツの大学の理念は、ドイツ理想主義哲学によって息吹を与えられたものでした。シェリング、シュライエルマッヒャー、フィヒテら著名な哲学者によって提唱され、ベルリン大学創設者フンボルトのもとで再編成され、具体化された後に、広くドイツ大学の本質とされるようになった理念です。

非実利的であるがゆえに〈純粋〉かつ〈自由〉に〈真理〉を追究する学問に関われるとした近代ドイツの大学の理念に、鷗外の大学論は重ねることができるように思います。『大学の自由を論ず』には、ドイツの大学理念が直接的なかたちで引用されていたわけではありませんが、日本における〈大学〉の〈自由〉の重要性を主張する鷗外の大学論のバック・ボーンとして、近代ドイツの学問観・大学観が厳然と響いていると言ってよいでしょう。

鷗外の代表的な小説として知られる『舞姫』（「国民之友」明治23［1890］年1月）にも、〈大学〉をめぐる記述があります。〈今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当りたればにや、心の中なにとなく妥ならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり〉という有名な件りです。

主人公である太田豊太郎が〈まことの我〉を自覚するこの印象的な文章には、〈所動的、器械的〉という表現と対比的に〈自由〉という言葉が用いられていることによって、文字通り、他からの影響・拘束・支配などを受けず、自らの意志や本性に従っている状態が強調されることになります。

鷗外の作品における〈大学〉の記述は、主人公その人のアイデンティティを表現する際に精彩を放っていると言え、そこには鷗外の〈大学〉像が投影されているとともに、鷗外の〈大学〉論へのこだわりが表出さ

れていると考えられるのです。すなわち、鷗外は〈自由〉の精神のもとに〈真理〉を追究し〈文化〉の発展をめざすのが〈大学〉の理念であると規定し、まさにその〈学問の自由〉を体現する場としての〈大学〉の〈自由〉の精神を尊重することになったのです。

このように鷗外の文壇処女作に頻繁に用いられていた〈学問〉という言葉ですが、鷗外の学問観が直接的に表明された講演の文章として『洋学の盛衰を論ず』（「公衆医事」明治35［1902］年6月）が挙げられます。この『洋学の盛衰を論ず』では、学術の研究を推進するには、そのための基盤・環境作りを意味する〈雰囲気〉が不可欠であることが、終始一貫して強調されています。

鷗外の分身的な要素をもつ主人公が、自分の精神遍歴をたどるという内容の短編小説『妄想』（「三田文学」明治44［1911］年3月・4月）でも、鷗外の学問観として、学術の研究を推進するために、その基盤・環境作りを意味する〈雰囲気〉が不可欠であるという主張が圧巻となっています。『妄想』においても、学問を尊重する思想的支柱や学問に携わることをめぐってのそもそもの心構えが、主人公の回想の形式をとることによって、その悟りの境地としての位置を占めることになっているのです。

陸軍軍医総監としての激務をこなしながら多数の小説・評論・翻訳を執筆・発表した明治40年代から大正初年代、すなわち1910年代の鷗外の学問観が表現された文章として、『文芸断片』（「東洋」明治44年4月、後に『文芸の主義』と改題）が挙げられます。そこには、〈学問の自由研究と芸術の自由発展とを妨げる国は栄える筈がない〉と記されています。

この『文芸断片』からは、明治43（1910）年、多数の社会主義者・無政府主義者が明治天皇暗殺を計画したとして検挙・処刑された「大逆事件」をきっかけにして、学芸・思想への当局の抑圧・弾圧が強化された時代状況に対して、鷗外が青春時代に受容したドイツの〈自由〉と〈批判〉の精神が生きていることがうかがえます。

このような学問に関わる鷗外の言説は、明治期のものに限定されたわけではありませんでした。一連の歴史小説に続いて、江戸時代の大名や旗本の情報をまとめた『武鑑』を収集することで到達した「史伝」というジャンルの作品のなかで、弘前・津軽家の侍医で考証学者である渋江抽斎の伝記を、その探索のプロセスとともに記した『渋江抽斎』（「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」大正5年1月～5月）にも、鷗外の学問観が直接的に表現されています。〈学芸を研鑽して造詣の深きを致さんとするものは、必ずしも直ちにこれを身に体せようとはしない。必ずしも径ちにこれを事に措かうとはしない。その兀々として年を閲する間には、心頭姑く用と無用とを度外に置いてゐる。大いなる功績は此の如くにして始てかち得らるるものである〉というものです。

ここには、学問は職業や何か他のもののためにのみ携わるものではないという、鷗外の学問観が生涯にわたるものであったことが示されていると言えるでしょう。そして、功利性の超越を唱えたこの学問のための学問観は、〈文化〉を創り〈学問の自由〉を実現する場としての大学観と一体のものであったと考えられるのです。

ドイツ留学での研鑽をとおして、またドイツ語文献を読むことをとおして、近代ドイツの大学理念や学問観に触れた鷗外は、自らの尊重する価値観を基盤として、ドイツの大学における〈学問の自由〉を礼賛することになります。学問は何か功利的な目的のための手段ではなく、真理を探究する営みそのものを意味し、大学はその学問の理念を実現する場であるという、ドイツ理想主義哲学によって生み出された学問・大学の定義を、鷗外は自家薬籠中のものとするのです。

先に挙げた『妄想』で、鷗外はドイツに留学した主人公の心中を、〈故郷は恋しい〉、〈美しい、懐かしい夢の国〉でありながら、〈自分の研究しなくてはならないことになつてゐる学術を真に研究するには、その学術の新しい田地を開墾して行くには、まだ種々の要約の闕けてゐる国〉であり、そこに帰って行くのは〈残惜しい、敢て「まだ」と云ふ〉と記しています。

“Forschung”（研究）とは、西洋の〈学術の輸入〉にとどまらないと綴られた『妄想』では、近代日本において学問の〈雰囲気〉を醸し出すことが最重要課題であると考えられていました。その〈雰囲気〉のなかでこそ、将来的に日本が西洋に〈輸出〉することができるような〈学術〉の〈発芽〉が育成されると、鷗外は

確信していたのです。

鷗外の言うこの〈雰囲気〉は、ドイツ文学者・小堀桂一郎によって、社会集団・民族などを特徴づける気風や慣習を意味する〈エートス〉と呼ばれ、小堀桂一郎の論文「『妄想』小論」（「国語科通信」第11号 昭和43［1968］年12月）には、〈鷗外が嘆いたのは日本に、学問的真理の要求に内面的に対決する精神、エートスが欠けていることである〉と記されています。

鷗外には、この〈学問的真理の要求に内面的に対決する精神、エートス〉を育成するために、西洋の〈自然科学〉の〈輸入〉に奔走するのではなく、西洋文化の〈精神〉そのものを理解しその〈精神〉と西洋の発展過程との結びつきを認識することが重要であるとの判断がありました。鷗外文学とはまさしく、日本の〈エートス〉の考察と個人の人生の意義追究とが結びついた成果だったと言えるのです。

そして、鷗外文学が鷗外自身の〈学問的真理の要求に内面的に対決する精神〉によって支えられていたように、学問・大学の理念についての認識もまた、真理を追究する永遠の営みであり、それを実践する場として表現されていたのです。

森鷗外の大学の理念、それを支えていた学問観を、一世紀が経った現代にそのまま適用するわけにはゆかないでしょう。けれども、処女作から晩年の作品にいたるまで、大学の意義と学問のあり方を表現してきた鷗外の大学論・学問観は、その真意が理解される時、最近の日本における大学や学問の論議に、一石を投じるにちがいないと思われます。

＊

21世紀の現代日本において、今やその〈自由〉が保障されたはずの〈雰囲気〉のなかで、多大の成果をあげているはずの〈学問〉が、さまざまの深刻な課題に直面しています。多様複雑な現実世界を反映して、学問の専門化・細分化が極端に進行し、一元的な価値基準が横行し知の交流を困難にしていること、競争原理に則り、効率・効用をスローガンとした今日的時代精神を強く反映して、実利的・功利的価値観が金科玉条とされていること、物質優先の大衆消費文化の隆盛によって、より安易に獲得できる、学問ならぬ情報が跋扈していることなどが、現代日本の一面として挙げられるでしょう。

この拙文でご紹介しましたように、鷗外の学問論・大学論は、学問に携わる者に、真理の探究という学問本来の目的を絶えず想い起こさせ、全体的な視野に立ち返ること、個々の分野の学問的意義を総合的に問いなおし、自己の分野を相対化する視点をもつことの必要性を主張していると考えられます。

効率・効用を唱えるあまり、学問的成果を性急に要求することが、学問を皮相浅薄なものにしてしまい、結果としてその衰退をもたらすことになるという危惧も、鷗外の学問観に既に示されていました。

そして、何よりも、学問の発展は人間の精神の〈自由〉と根源的に関わっていることを、鷗外の学問観は指摘していました。その主張は、人間精神の〈自由〉は、人類が営々とその〈文化〉を創造してきた原動力であり、〈学問的真理の要求に内面的に対決する精神、エートス〉を生み出すことができるという認識に裏付けられていました。

言い換えれば、〈自由〉を喪失した大学の理念や学問の定義は、真理の追究を無意味にし不可能にするということ、真理の追究ではなく実際の利益のみが追求される時、学問はその営利実践の手段となり、大学はその営利実践の場となってしまうことを、鷗外の学問観・大学論は警告してやみません。

学問の本質とは何か、大学の使命とは何か、このような根本問題について考える時、鷗外の学問論・大学論から学ぶべきことは少なくないと思います。あらゆるものからの〈自由〉を得て初めて、真理は何ものにも歪められない真理であることを、鷗外文学が示唆し続けていると考えられるからです。

（拙稿「森鷗外の〈大学〉論と〈学問〉観――その主張内容に見る現代的意義」
（「岐阜大学地域科学部研究報告」第10号　2002年2月］から一部転載しました。）

＊21世紀が始まって10年

フォトジャーナリスト　中村梧郎（元　岐阜大学地域科学部教授）

21世紀が始まって10年が過ぎた。世界はどのような方向へ行こうとしているのだろうか。オバマ政権の誕生で、人々はアメリカが変化することを期待した。だが、アフガニスタンに米軍を増派するオバマの決定を聞いて落胆した人は多い。イラク、アフガンとすでにベトナムを超える戦費をつぎ込み、戦場は泥沼化している。

今年はベトナム戦争が終わってちょうど35周年にあたっている。大国の介入でベトナムを南北に分けた北緯17度線、ベンハイ川の現地に4月末に行ってみた。平和と繁栄を象徴するかのように巨大な蓮の花の灯篭が川面に浮かび、人々は急ごしらえのステージで歌い踊っていた。このあたりは戦争中、米軍が空中から投下したソナーが地面に無数に刺さっていて、歩く人間を探知した瞬間に米軍基地から砲撃された現場である。一帯は「マクナマラの電子ライン」と呼ばれ、地上の建造物も森林も跡形も無く壊滅させられていた。

ジョンソン政権の国防長官であったR.マクナマラは、戦後に出した「マクナマラ回顧録」で“ベトナム戦争は誤りだった”と反省して見せたが、すでにベトナムは瓦礫の原と化した後のことだ。北爆開始の理由となったトンキン湾事件は米側のデッチ上げであったことも彼は認めた。イラクへの侵略開始も“大量破壊兵器を隠し持つ”という捏造データによっている。戦争はいつの日も、侵略する側のデッチあげとプロパガンダによって展開される。そして数百万もの犠牲者は何のためかも分からぬままに殺されている。

「電子ライン」周辺では冬春期の稲がもう実っていた。自然は回復し、生き残った人間はエネルギッシュに活動を始めていた。しかし“事実の捏造と侵略戦争”という構図は車の両輪のように支えあい、いまだに世界で大手を振っている。戦争の20世紀が示した悲劇と不条理から、21世紀はまだ何も学んでいないと言わなければならないのだろうか。

＊森の会役員就任にあたっての抱負

2004年度卒業　中山智隆

みなさんこんにちは!!このたび森の会役員（幹事）を務めさせていただくことになりました中山智隆です。私は1999年度入学の3期生です。地域科学部には6年間在籍し、2004年度に卒業しました。その間に多くのことを学ばせていただき、地域科学部での経験は現在でも大変多くの役に立っています。卒業してからも、お世話になった地域科学部（研究科も含めて）になにかしらの形でお役に立ちたいと思っていました。今回役員を務めさせていただくことになり、地域科学部の役に立つ機会を与えていただけたとわくわくしております。

私は、役員として現在の学生さん、現在の地域科学部に貢献できるような活動をしたいと考えています。地域科学部には学生自治会等の、公式の学生組織がないと聞いています。そういった状況に加え、地域科学部自体の歴史が浅いことも手伝って、学生さんをより体系的、より効率的にサポートする体制がまだまだ未整備である状況であると思います。そのため、たとえば学生さんが独自に企画を考えられても、学部としてそれをバックアップすることが難しいということがあるようです。

現在は大学（学部）間での競争がより大きなものとなり、社会に出て行かれる学生さんの質のあり方がより大きく大学（学部）の評価を左右するという状況にあると思います。そういった状況を考えると、教職員の皆様の平素のご尽力に加え、同窓会としても日常的に学生さんのサポートをすることができるような体制を作ることは意義があるものと思います。それにより、学生さんの大学での生活をより楽しいものにし、地域科学部としての評価を高めることに少しでも寄与できればと思います。具体的な活動としては、学生さんの自主活動のバックアップ、学生さんと卒業生との交流会、学生さんの就職活動等についてのバックアップ、といったものを考えています。

この文章を書いてみて、かなりおせっかいな同窓会役員が加わったというような感じを私も受けていますが、在学中から考えていたことと変わっていないとも思います。どうかこれからよろしくお願いいたします。

平成21年度会計報告

○収入の部

項　　目	決算額（円）	摘　　要
前年度繰越金	9,829,298	
会費	730,000	10,000円×73名
総会会費	37,000	2,000円×18名、1,000円×1名
利息	2,032	
合　　計	10,598,330	

○支出の部

項　　目	決算額（円）	摘　　要
事業費		
・知の森印刷・発送	92,925	
・森の会ニュース印刷・発送	252,615	
・卒業を祝う会援助金	100,000	
通信費		
・郵便代	50	
事務費		
・事務人件費	293,514	事務局経費
・事務用品費	118	
運営費		
・会議費	48,000	大学創立60周年記念式典
・交通費	39,120	同窓会連合会設立記念式典
・諸経費	7,905	
総会費		
・講師謝礼	11,111	所得税納税
・懇親会経費	44,166	
合　　計	889,524	

項　　目	収入の部（円）	支出の部（円）	差引計（円）
次年度繰越金	10,598,330	889,524	9,708,806

帳簿及び証拠書類を監査した結果、上記のとおり相違ありません。

平成22年4月25日

監　査　祖父江 利佳

監　査　伊藤 健人

岐阜大学地域科学部平成22年3月卒業者の進路状況について

平成22年5月1日現在

1.卒業者の進路希望

進学希望者	就職希望者	その他	計
7名	102名	4名	113名

＊「その他」は、専門学校・未定等。

2.大学院進学希望者の状況

本学部大学院	本学他大学院	他大学大学院	その他	計
3名（合格）	1名（合格）	3名（合格）	0名	7名
	工学研究科	青山学院大学 東北大学 名古屋大学		

3.就職希望者の状況

	求職者数	決定者数	決定率
企業志望	75名	73名	97.3%
公務員志望	27名	24名	88.8%
計	102名	97名	95.0%

4.就職先・業種別区分

ｾﾐﾅｰ所属講座	地域政策講座	地域環境講座	地域文化講座	地域構造講座
企　業	製造業（3） 運輸・情報（4） 金融・保険業（8） 卸・小売（2） サービス業（2） 複合サービス業（1） 飲食・宿泊（1） 教育・学習支援（1） 医療・福祉（1）	製造業（5） 運輸・情報（4） 金融・保険業（2） 卸・小売（4） 複合サービス業（2） 医療・福祉（1）	製造業（2） 運輸・情報（1） 金融・保険業（5） 卸・小売（1） サービス業（1） 医療・福祉（1）	建設業（1） 製造業（2） 運輸・情報（3） 金融・保険業（8） 卸・小売業（2） サービス業（2） 生活関連,娯楽業（1） 飲食・宿泊（1） 医療・福祉（1）
公務員	裁判所（1） 市役所（6） 県警（5） 県庁（1） 学校事務（1）	市役所（1） 県警（1） 県庁（1） 町役場（1）	県警（1） 町役場（1）	市役所（2） 消防（2）

5.おもな就職先

〈企業関係〉

（建　　設）	アイワホーム
（製　　造）	東海共同印刷株式会社／学宝社／第一紙行／貝印／レシップ／アイシン高丘／森精機製作所／アイシン・エーアイ／服部精工／三甲／三ッ星化成品／黒田精機製作所
（運輸・情報）	岐阜乗合自動車／全日本空輸／ユーフィット／トヨタデジタルクルーズ／TKC／ソフィア総合研究所／共立コンピューターサービス／インフォファーム／郵便局事業
（金融・保険）	大垣共立銀行／幡州信用金庫／三井住友銀行／十六銀行／岐阜信用金庫／みずほ銀行／岡崎信用金庫／北陸労働金庫／大和証券株式会社／三重銀行／三菱東京UFJ銀行／のと共栄信用金庫／東京海上日動火災保険／明治安田生命保険／かんぽ生命保険
（卸・小売）	ロングラン／関ヶ原石材／豊田通商／中央工機／山信／セイノー商事／シャルドネ／ヤナゲン／エスピーカンパニー
（医療・福祉）	愛知県厚生農業協同組合連合会／いぶき福祉会／岐阜県厚生農業協同組合連合会東濃厚生病院
（サービス業）	光通信システム／中日本高速道路（NEXCO）／ベルパーク
（複合サービス）	西春日井農業協同組合／名鉄協商／西美濃農業協同組合／JAひだ／ホテルニューオータニ長岡／物語コーポレーション
（教育・学習支援）	蛍雪ゼミナール
（生活関連、娯楽業）	ミズボウ木曽川スイミングスクール

〈公務員関係〉

岐阜地方裁判所／岐阜市役所／大垣市役所／岐阜市消防本部／神戸町役場／岐阜県北方町立北方小学校／愛知県庁／愛知県警察／豊橋市役所／清須市役所／稲沢市役所／いなべ市役所／宮城県警察

平成22年度　森の会役員　（①・・・第1期生、③・・・第3期生、⑩・・・第10期生）

会　長／浅井　彰子①
副会長／淺野　善信①　石黒　好美①　都築　尚子①
幹事長／加地　和歌子①
幹　事／眞鍋　陽子①　伊藤　雅浩①　中山　智隆③　笠原　正博⑩
会　計／荒瀬　修三③
監　査／伊藤　健人③　祖父江　利佳①

森の会　会員数　1,225名　（平成22年4月1日現在）

7月24日（土）地域科学部同窓会総会・懇親会開催！

来たる2010年7月24日（土）、地域科学部同窓会の総会と懇親会を母校岐阜大学で開催します。
今年は、高橋弦先生によるミニ講座を企画しています。ぜひご参加いただき、懐かしい同窓生や先輩・後輩および先生方との交流をお楽しみください。
なお、今年も在学生の皆さんもおさそいしています。

岐阜大学地域科学部同窓会総会・懇親会

■ 場　　所　岐阜大学地域科学部第1会議室
■ 日　　時　2010年7月24日（土）
10:30～受付開始
11:00　総会
11:15～12:00
高橋弦先生によるミニ講座
『社会性の復興 ～市場主義への対抗～』
12:00～懇親会　※懇親会のみの参加もOKです

■ 会　　費　1,000円（在学生は500円）当日、受付にてお支払いください。

■ 申し込み方法
この会報に同封のはがきに必要事項をお書き添えの上、
6月30日（水）必着でご返送ください。
一人でも多くの皆さんのご参加を心よりお待ちいたしております！

～昨年度の様子～

森の会の皆さま、いかがお過ごしでいらっしゃいますか。それぞれの場でご活躍のことと存じます。
さて、第1期生の卒業から今年で10年目。森の会も結成されて10年目ということになります。この間、役員の大半を第1期生が務めてまいりました。今年は新たにお二人が加わってくださいましたが、まだまだ設立当時のメンバーが中心的です。昨年度から目加田さんという心強い事務担当者もいてくださるようになって、事務作業が大変スムースに行えるようになりましたし、10年の節目を機にそろそろバトンタッチが良いのではと思っております。フレッシュな感性で、豊かに楽しく同窓会を盛り上げていってください。会の運営に参画してみたいと思ってくださる方のご連絡をお待ちしております。
7月24日には総会を開催いたしますので、なつかしい母校で旧交をあたためつつ、語り合いましょう。卒業生の皆さま、先生方、職員の方々、多くのご参加を楽しみにしております。

（森の会　会長　浅井彰子）

※森の会ニュースではみなさまからの近況報告、ご意見・ご感想を募集しております。
メールまたは郵送にて下記宛先までお送りください。

連絡先
岐阜大学地域科学部同窓会　森の会事務局
〒501-1193　岐阜市柳戸1番1　岐阜大学地域科学部内
e-mail:mori2001@gifu-u.ac.jp

住所・氏名の
変更なども
お知らせ下さい。